

ヤスパースの「愛の闘争」概念

その実存概念に基づく研究報告

石神慧(バーゼル大学大学院)

20 世紀の実存哲学を代表する者の一人、カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883-1969)はその著作中度々「愛の闘争」という独自の概念を用いて自らの思想を展開している。この概念はヤスパース哲学の多くでその中心に関わり、また時にはその中心ですらある。それ故この概念の解明がヤスパース思想の理解にとって非常に重要なことであるのだが、未だかつてこれを試みた研究が存在しない。このことはヤスパース哲学の理解と普及にとって大きな障害であると思われる。それ故筆者はこの概念の解明を自身の研究プロジェクトに据え、次なる研究戦略によってそれに取り組んだ。1. 『哲学』第2巻第3章に著された「愛の闘争」の性格づけを解明する。2. その性格づけを「愛」、「闘争」、「実存」、「真理」、「交わり」の5つの基本概念を手がかりにして解明する。本発表ではこの内「実存」に関して行われた研究の中から一部を抜粋して研究成果を報告する。

本発表では始めにヤスパースの実存概念に対する研究成果の一部を提示する。「私は呼びかけられているということを知っている。かように呼びかけられているということに対して、私は、私自身の存在を実現することによって本来的に私自身として内面的に答える」(Jaspers, 1956a, S. 16. 邦訳は21頁) 実存に関連する文脈の中でヤスパースはこのように述べている。この記述は『哲学』第2巻第1章で論じられた思想と深い結びつきを持っている。すなわち、ヤスパースはそこで、明確な原因を持たない漠然たる不満(「ゆえ知らぬ不満 [u]nbezügliche Unbefriedigung」)について論じている。ヤスパースによれば、この不満は「私自身の根源から存在しようとする要求 *Anspruch, aus dem Ursprung meiner selbst zu sein*」(Jaspers, 1956b, S. 6. 邦訳は9頁)、すなわち私たちの内なる根源的自己存在が自らを顕現せんとすることによってもたらされる心理現象の一つである。上記引用文における「呼びかけられている」とは今述べた種類の自己の内奥からの要求のことであり、「私自身の存在を実現することによって本来的に私自身として内面的に答える」とは、(本来あるべき自己であろうとする時) 私たちはその自らの内なる要求に耳を傾けそれに応じて自己変革を行うということである。この分析から得られる知見として本発表主旨にとって重要なのは次の二点である。1. 人間の内には現状の自己に対してまだ実現されていないが実現されるべき本来的・根源的自己が存在するという観念をヤスパースが有しているということ、2. この存在は折に触れ、自らに対する「要求」として経験される。それは、自己を変革し、本来的自己を実現するための重要な契機であるということである。本発表ではこれらのことを念頭に『哲学』第2巻第3章に記述された「愛の闘争」の性格づけの解釈を提示する。

本発表で言及するのは次の二点である。一つ目は「愛の闘争」の性格づけ第2パラグラフに著されたもので「自己獲得 *Sichgewinnen*」の性格づけである。「実存が可能であるかぎり、それは、(部分的には客観的となるが、現存在のモチーフからは理解できないところの) 闘う自己献身を通じて、(決して客観的にはならないところの) 自己獲得として、現れるであろう。」(Jaspers, 1956b, S. 65. 邦訳は79頁) ヤスパースはこのように「愛の闘争」を性格づけている。この「自己獲

得」は「自己存在の獲得」と読み変えることができ、前述したヤスパースの人間観と結びつけて解釈するならば、その意味はまだ実現されていない根源的自己(としての意識・在り方)を実現することだと解することができる。だが、さらに詳細な解釈が次の二つ目の記述部分の検討によってもたらされる。

二つ目の言及箇所は「愛の闘争」の第4パラグラフにおける性格づけに関するもので、この闘争は他者のみならず自分自身に対する闘争でもあるとされている点である。すなわち次のように記述されている。「おのおのの者は、他者とともに自己を掘り下げる。それは二人の実存相互の闘争ではなく、自己自身と他者に対する一つの共通の闘争である。」(Jaspers, 1956b, S. 66. 邦訳は78頁)この記述部分に関しては、前述されたヤスパースの人間観に加え、次の記述も合わせて参照されなければならない。「本来的自己としての私にとっては、私の性格は自我でない。私は性格をもち、性格に作用をおよぼす。私は、与えられたものであるがゆえに、盲目である性格の存在と闘って、それを、一つの自由に欲せられた存在に変化させ、そのうちで私自身を發展せしめ、それを私の責任として引受ける。」(Jaspers, 1956b, S. 47. 邦訳は57頁)これは「自己超克における自己生成 *Selbstwerden in Selbstüberwindung*」という一節(『哲学』第2巻第2章)に記述されたもので、先行する議論を踏まえて書かれたものである。すなわち、ヤスパースは「私自身」とは何か(あるいは誰か)という問題提起を行っており、それに該当し得る人間の諸要素を一つずつ検討している。「性格」はその中で取り上げられたものの一つである。上記引用文はこれが「私自身」に該当しない理由を説明したものであり、意味することは、私たちは所与としての自らの性格に対し、そのあるがままの在り方を否定し、これを変革しようとする働きを内に持つ。私たちの内には所与としての性格を自らにとって非真理である(従って「私自身」ではない)とみなす根源存在ないしは働きを持つ。それ故「性格」は「私自身」とはみなし得ない、ということである。

上記引用文と並んで重要なのが、これに続けて記述されたものであり、次のものである。「私自身が諸々の動機のうちにある場合でも、現象における自己超克なくしては、真の自我はない。真の自我は、自らが不真実と評価した自分の(自己)の殻をば拒否する。」(Jaspers, 1956b, S. 47. 邦訳は58頁)ヤスパースは「真の自我」、すなわち本来あるべき真の自己は所与としての性格をはじめ、あるがままの現状の自己を克服することなくしてはもたらされないと考えている。この記述と結びつけて件の「愛の闘争」における性格づけを解釈すれば、「自己自身に対する闘争」とは所与の性格をはじめとする己の現状の自己の有り様を省みて変革しようとする自己自身に対する取り組みのことだと解され得る。また、前述した己の内奥における本来的自己の要求の経験は、現状の自己を対象化し、疑問視することに資するものであることを思えば、前述した「自己獲得」の性格づけは己の根源的自己存在を経験しつつ、これに基づいて現状の自己を省みて変革することによって現に己にとつての真なる自己を実現することをも意に含んだものだと解することもできるのである。